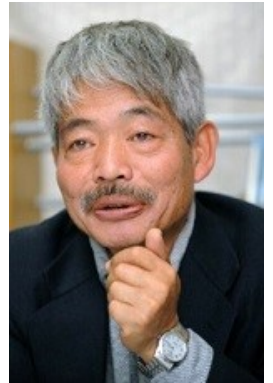


## 備忘録ないしは切り抜き帳(その159)

[2020年12月5日(土)]

○昨日に続いて、西日本新聞のコラム“春秋”を以下に転載させて頂く。「それぞれのお立場から忌憚のないご意見をお述べいただき、審査の参考にいたしたいと存じます」。2001年10月13日の衆院テロ対策特別委員会は委員長のような発言で始まった。▼米国のアフガニスタン攻撃に関連し、自衛隊の後方支援の是非を論議する委員会だ。参考人として呼ばれた一人が「ペシャワール会」現地代表の中村哲さんだった。▼中村さんは当地の実情を踏まえ「自衛隊派遣は現地の人々の日本に対する信頼を崩しかねない。有害無益でございます」と自説を述べた。すると政府の方針を否定されて腹を立てたのか、自民党議員が「取り消しを」と中村さんに要求した。▼中村さんはやじを浴びながら淡々と説明を続けた。するとこの議員は「結構です」と中村さんの話を途中で打ち切った。自分たちで「忌憚のないご意見を」と呼んでおいて、気に食わないとこの態度である。▼日本学術会議の会員任命拒否問題で19年前のこの出来事を思い出した。任命拒否の理由に関する菅義偉首相の説明はどれも破綻しており、学者たちが政府の政策に反対していたことが真の理由であるのは間違いないさそうだ。▼要は「批判など聞きたくない。言わせたくもない」ということか。「立場は違っても意見は聞こう」という度量さえない。中村さんが亡くなり、今日で1年。取り消しを迫った議員もすでに世を去ったが、自民党は悲しいほど変わっていない。」



中村哲さん

[2020年12月6日(日)]

○今朝の東京新聞筆洗を転載させて頂く。「ある政治家が演説のコツについて書いている。大切なのは語り手の「まなざし」らしい。▼どんなに大きな会場でも小さな会合でも、出席者すべての人間を個々にながめるよう努力するのだという。そうすることで人をひきつけ、自分もまた人からエネルギーをもらえるそうだ。▼伝えたかったのは演説のコツではなく、政治家としてのコツかもしれない。群衆全体ではなく、ひとりひとりの顔を強く意識し、語りかける。書いているのは先日亡くなった元フランス大統領のバレリー・ジスカールデスタンさんである。94歳。▼現在のサミットにつながる先進国首脳会議を提唱したほか、欧州統合への下地づくりなど外交上の成果を残した。国内においては女性の権利向上に取り組み、女性閣僚を積極的に起用した大統領でもある。▼さて演説などで個々の顔を見るように努力した結果、その人にどんな効果があったか。恋に落ちたそうである。「7年間の大統領在任中、私はすべてのフランス女性に恋していた」。お国柄もあろうが、ここまで言い切れる政治家はいないだろう。▼どこかの国の首相の記者会見を見た。うつむきがちなこの人の「まなざし」は、だいたい手元の原稿用紙に向けられている。それを読み上げるばかりで、質問には正面から答えようとしな。見ている方は恋はおろか、大切に思われている気もあまりしない。」

[2020年12月7日(月)]

○西日本新聞“春秋”の『「安倍一族」の忠誠心』と題するコラムを以下に転載させて頂きたい。「森鷗外の小説「阿部一族」の舞台は肥後熊本藩。藩主が亡くなったとき恩顧の家臣たちが忠誠を競って追い腹(切腹)をしたことから物語は始まる。▼殉死は18人に上ったが、側近の阿部弥一右衛門はできなかった。生前の藩主から「生きて新藩主に奉公せよ」と命じられたためだ。けれど、周囲で「恩知らず」「臆病者」と非難が高まる。弥一右衛門は憤然として腹を切った。▼名誉を守るための死は、逆に君命に背く大罪と見られる。新藩主は討伐命令を出し、阿部の一族は屋敷に立てこもって抗戦。壮絶な最期へ向かっていく。▼現代には「安倍一族」と呼びたくなる人々が国政にいるようである。「桜を見る会」前夜の会費支出を巡り、安倍晋三前首相の答弁が虚偽だった疑いが強まっている。それなのに真相究明の動きは鈍い。会期延長要請を振り切り臨時国会は閉会。問題を避けたいのが政府、自民党の本音だろう。▼前首相側は「秘書が誤った報告をした」と釈明しているそうだ。仮に部下の間違った報告が原因であっても、社長がうその説明を数々重ねたなら責任は免れまい。社会一般の常識に照らして国民は納得するだろうか。▼世論の動向に、さすがに分が悪いと感じたのだろう。これまで「できる限りの説明をされてきた」と擁護してきた党内からも、前首相への厳しい意見が出始めたという。1強を誇った一族の中で、忠誠心も揺らぎ始めているか。」🗨️ 記者に向けて「後ろから質問をするな」など、安倍前首相の態度は相変わらず横柄でいただけない。

[2020年12月8日(火)]

○今朝の東京新聞“筆洗”を以下に転載させて頂きたい。「その朝の授業は、鬼のあだなで畏怖された教授の英語だった。その朝とは、1941(昭和16)年12月8日。日米開戦の日だという。

▼開戦の臨時ニュースが、校内に伝えられた。教授は廊下に飛び出し「万歳」と叫んだそうだ。当時の学生が書き残している。▼作家、半藤一利さんの『十二月八日と八月十五日』にあったが、とりわけ珍しい話ではなからう。〈やみがたくたちあがりたる戦(たたかい)を、利己妄慢(ぼうまん)の国国よ見よ>斎藤茂吉。長く続く米英との緊張。当時の国民はうっとうしさや閉塞感の中にあり、真珠湾攻撃はその暗雲を吹き飛ばすかのように受け止められた。「利己妄慢」の米英という大国に挑む痛快さもあつたという。茂吉もそうだったのだろう。▼11年後の1952年に建立された、広島原爆死没者慰霊碑。碑文は〈安らかに眠って下さい/過ちは繰返しませぬから〉である。その言葉を考案したのは12月8日に「万歳」を叫んだあの教授だそうだ。▼歴史の皮肉を書きたいわけではない。教授の名は、当時、広島大学教授の雑賀忠義さんとおっしゃる。この人も被爆している。▼あの日、今から考えれば、勝てるはずもない日米の開戦に国民の大半が高揚した。記憶にとどめなければならぬ戦争の過ち。それは、軍や政府によるものだが、感情に任せたわれわれの側の「万歳」をそこから除く理由もまた見当たらぬ。繰り返すまい。」



2017年9月に広島市で開催された建築学会年次大会の折に訪ねた平和記念公園にて。

[2020年12月9日(水)]

○今朝の東京新聞社説『はやぶさ2 帰還 天体衝突から地球守れ』に感動したので以下に転載させて頂く。「無人探査機「はやぶさ2」が帰還し、カプセルを置き土産に、また長旅に出た。次の目的は地球に落ちてくるかもしれない小惑星の探査。人類の存続危機を救うのは、着実な技術の積み重ねだ。宇宙航空研究開発機構の「はやぶさ2」は、2014年に打ち上げられた。長い旅の末、小惑星「りゅうぐう」で岩のかけらを採取し、その容器を分離して地球に落とすことに成功した。これから行われる分析によって、生命の起源や太陽系の起源について、新たな知見が得られるかもしれない。先代「はやぶさ」も含め、これまでは真理追究型の目標が掲げられてきた。「はやぶさ2」の次の探査では初めて、天体衝突から地球を守ることが、使命の一つとなった。主目的が終わった後の「延長ミッション」という位置付けではあるが、成功すれば人類の危機を救うことにつながる。目標は「1998KY26」という直径30mの本当に小さな天体で、地球に衝突する可能性があるという。到着は今から11年後の1931年になる。地球の周囲には70万個以上の小天体があり、時々地球に落ちてくる。6600万年前には、直径10~15kmというかなり大きい天体が衝突し恐竜が絶滅した。同程度のものが落ちたら文明は崩壊する。この規模の衝突は数千万年に一度くらいだが小さいものはもっと頻繁だ。2013年には直径20mほどの天体がロシアに落ち、1500人以上がけがをした。数10m級でも直撃すれば一つの町を破壊する力がある。対処法はある。観測で危険を早く見つけ、小天体に飛んで行って何らかの力を加え、軌道を変えればよい。本番となれば大がかりな国際プロジェクトになるだろう。先代「はやぶさ」は試験機のような位置付けで、さまざまな不具合を起こした末、辛うじて地球にたどりついた。「はやぶさ2」は得られた教訓を生かし、ほぼトラブルなく帰還した。地道な改良の積み重ねが、狙った天体に飛行する技術を進歩させた。今後さらに、長距離を効率よく航行できるエンジンの開発や、正確な軌道制御を行う方法の確立が求められる。国威発揚から発展した宇宙技術が、地球防衛につながることは望ましい変化だ。尊い目標に向け、旅の安全を願う。」 ☞ 日頃は不満ばかりを口にしているが、このようなニュースに接してみると、わが国の科学技術も捨てたものではないと誇らしく思われる。「やみがたくたちあがりたる戦を、利己妄慢の国国よ見よ」の斎藤茂吉の心境に近づかないように気を付けたい。

○毎日新聞のコラム“余録”を以下に転載させて頂きたい。「紀州・広村を襲った津波で村民の避難を誘導した「稲むらの火」の物語のモデル、浜口梧陵はその後私財を投じて広村堤防を築いた。ラフカディオ・ハーンは「生き神」という一文でその事績を顕彰している。▲梧陵は医療への支援でも大きな役割を果たす。名高いのは江戸の西洋種痘所が焼失した際に、何百両も寄付して再建させたことだ。種痘所を作った幕府内の開明派が大老・井伊直弼により左遷され、再建が絶望視されていた時だった。▲この種痘所は後に東大医学部となる。人々の健康を願う高い志にも支えられてきた人類の感染症との闘いである。種痘に始まるワクチンはその闘いの決め手だが、いよいよスピード開発された新型コロナのワクチンの接種が始まった。▲Vデ

一. ワクチンと勝利の頭文字を冠し、英保健相はきのうのワクチン接種開始日をそう呼んだ。認可を受けたワクチンとしては世界初、英国内の指定病院で始まった医療・介護従事者、80歳以上の高齢者らを対象とする接種である。▲米国でも近く接種が始まるが、これら感染状況の厳しい国の局面転換への期待を集める新ワクチンだ。日本での接種開始の時期はもちろん気になるが、感染症への対処は人類的な課題でもある。途上国にも適正に配分せねばならない。▲途上国むけワクチンの国際共同調達をはかる、COVAX(コバックス)などの取り組みはしっかり支えたい。梶原は津波防災で世界的に有名だが、その種痘普及への志も受け継がねばならぬ今日の日本人だ。」☎ 知らなかった！

[2020年12月11日(金)]

○今朝の毎日新聞“余録”を以下に転載させて頂く。「医者たちは病気が何か分からず、自分たちがまず犠牲者になる危険にさらされた。患者たちは神殿につめかけて助けを求めたが、何の救いも得られなかった」。たとえばこれは古代アテナイの疫病の記録である。▲古来、悲惨な疫病の歴史的記録は、神を信じる者も信じぬ者も、善人も悪人も、貧者も富者も、老若貴賤の区別なく、等しく命を奪い去られる衝撃を生々しく描いている。「人の掟も神の掟もみな威信を失い、消えてしまう」のである。▲いわば神も仏もない絶望感は、人々の医学への信頼の厚い今日ならば「医療崩壊」の恐怖と似ていよう。そんな不吉な言葉がますます現実味を帯びてきたから心穏やかでない。各地でとまらぬコロナ感染拡大による医療体制の危機だ。▲北海道旭川市の病院での大規模クラスター(感染者集団)発生で、医療体制の逼迫が地域に連鎖的に広がっている。自衛隊の看護官らが支援に入ったが、コロナ以外の診療にも支障が生じ、医療従事者の疲労はつるばかりだという。▲感染が広がる現在、このような医療崩壊の危機は全国どこの市町村でも起こりうる。また大都市圏では大阪府が自衛隊の支援を要請し、感染者が1日600人を超えた東京でも医療逼迫が始まったと専門家が危機感をあらわにした。▲旅行など人の移動促進に巨費をつぎ込みながら、いざ感染が全国で広がればすぐさま医療体制の逼迫や疲弊が露呈するのはどうしたことか。古い記録の伝える絶望を、今日よみがえらせてはならない。」



12月12日付け東京新聞に掲載された佐藤正明氏の風刺漫画

[2020年12月14日(月)]

○朝日新聞が12月14日7時43分にベルリンから配信した『ドイツ、感染者増でロックダウン強化 学校など原則閉鎖』と題する記事を転載させて頂く。「ドイツ政府は13日、新型コロナウイルスの感染拡大防止のためロックダウン(都市封鎖)を強める方針を決めた。16日からはスーパーや薬局、銀行など日常生活に必要な店を除く大半の商店を1月10日まで閉鎖し、学校も原則として閉じる。ドイツはフランスなどと比べて緩やかな制限策をとっていたが、新型コロナの感染者数や死者数がこれまでに最も高いレベルで推移しており、方針転換を迫られていた。ロックダウン強化は、メルケル首相と各州首相らがテレビ会議を開いて決めた。11月から導入していた「部分的ロックダウン」では飲食店や娯楽施設などを閉じつつ、商店や学校などは開けていたが、今後は一般商店や美容室なども閉鎖する。飲食店は持ち帰りや配達での販売はこれまで通り認めるが、公共の場で酒類を飲むことは禁止する。また、大みそかや元日に大勢で集まることや、恒例の年越し用の花火の販売を禁じるほか、国内外の旅行の自粛、企業の事務所閉鎖も求める。記者会見したメルケル氏は「医療システムに大きな負荷がかかっている」と方針転換の理由を述べた。ドイツは1日の新規感染者数が11日に29,875人、死者数が598人と過去最多を記録した。(ベルリン=署名記事)」☎ メルケル首相の演説をTVニュースで拝見したが、実に熱のこもった説得力のある演説であった。無意味な笑いを取るために「ガースーです」とか言って薄笑いを浮かべていた、どこかの国の首相とは大違いである。



ベルリンの連邦議会で9日、演説するメルケル首相=AP


[2020年12月17日(木)]

○今朝の毎日新聞“余録”を転載させて頂く。『この雪に馬鹿者どもの足の跡』と題しておく。「夏草やつわものどもが夢の跡」をもじった「この雪に馬鹿者どもの足の跡」という江戸川柳がある。雪が降ればいさんで

雪見に出歩く物好きをからかった句で、昔の江戸は今よりも雪の日が多かったようだ。▲雪景色の浮世絵や雪見の名所の評判がそれを示している。実際に江戸時代後期の気候は寒冷で、隅田川の結氷という記録もある。ただ、雪にはしゃいだ江戸の人に対し、雪国の人が豪雪に苦しみ、恐れたという対比は今昔変わらない。▲越後の人・鈴木牧之が、初雪が来れば喜ぶ江戸の人と、これからの雪中生活を思う雪国の人を比べ「楽と苦と雲泥のちがいなり」と記したのもよく分かる。さて雪のシーズンも始まったばかりなのに、早くもドカ雪が雪国を襲っている。▲列島上空への強い寒気の流入により、まだクリスマスも先なのに日本海側の地方や関東の山沿いでは記録的な大雪に見舞われている。群馬県みなかみ町や新潟県湯沢町では24時間の降雪量がそれぞれ観測史上最高を記録したという。▲交通への影響や停電の被害も各地で出ている。きょうも降雪は続くというから、屋根からの落雪や雪崩への警戒も必要だろう。例年ならクリスマスや年末年始寒波が話題となるが、雪国の人も驚く師走半ばの記録的寒波の急襲である。▲「雪は天から送られた手紙」とは氷雪の研究で知られた物理学者・中谷宇吉郎の言葉である。シーズンのつけからのドカ雪も、荒々しさを増す地球規模の気候変動にまつわる天からの消息なのかもしれない。」

○同じく東京新聞“筆洗”の『藪医者 of 匙(サジ)』も以下に転載させて頂く。「ある晩、盗人が医者 of 家に押し入った。女房が気付いて亭主を揺り起こすと、盗人は脇差しを抜き「手向かいすれば斬るぞ」。亭主は何を思ったか商売道具の薬箱を引き寄せ、中からサジを取り出し、盗人に向け「これでもか」とひらひらさせる。盗人は、「これはたまらない」と逃げ去った。▼江戸後期の笑い話だそう。題名は「庸医七(やぶいしゃのさじ)」。亭主はよほど有名なやぶ医者だったのだろう。でたらめなサジ加減で薬を調合し、たくさんの患者さんを冥土に送ったか。なるほど盗人も震えるサジである。▼江戸時代ではなく、今の製薬会社がひらひらさせる誤った「サジ」に震え上がる。製薬会社「小林化工」(福井県あわら市)の「爪水虫」などの治療薬に睡眠導入剤成分が混入していた問題である。▼服用した70代の女性が亡くなっているほか、意識をなくすなどの健康被害が相次ぐ。知るよしもなくハンドルを握った服用者による自動車事故も起きている。▼治療薬の原料を継ぎ足す際、主成分の容器と睡眠導入剤の容器を間違えたとはあきれる。品質検査で異物混入を示すデータがあったにもかかわらず出荷したとの報道もある。それは薬ではなく毒薬であろうに。▼出回った約10万錠以上の回収と真相究明を急ぎたい。「七」という漢字をもう一度見つめるべきだ。それは「サジ」のほか、命を奪う「七首(あいくち)」の「七」でもある。」

[2020年12月18日(金)]

○今朝の東京新聞“筆洗”を以下に転載させて頂く。「南北朝時代の武将で、後世に忠臣とたたえられることになる児島高德が高位の武将をいさめる一場面が『太平記』にある。いわく、戦に負けるのは必ずしも恥ではない。だが、く引くまじきところをひかせ、懸(か)くまじきところをかけさせるを、大将の不覚とは申すなり。▼守る時でないのに守らせ、攻め時でないのに攻めさせるのは失敗である。武将たる者は、攻守のちぐはぐを避けなければならないと。▼「勝負」と言われたコロナ流行下の三週間で過ぎた。感染者数は増え続けていて、医療機関への負荷も高まり、厳しくなっている地域も出始めた。勝負は残念ながら敗色濃厚である。▼政府は、対策分科会が見直しを求めたにもかかわらず、この間「GoToトラベル」を続けてきた。経済をまわす効果があったにせよ、守るべき時に国民にちぐはぐなメッセージを送ることにならなかったか、疑問は残ろう。停止が決まり、今は業界から悲鳴が上がる。▼われらが大将ならぬ菅首相は、出すべき時に、国民への言葉が乏しいようだ。出てはいけぬ食事会にも出た。どうもちぐはぐである。▼相撲の立行司、木村庄之助が代々受け継いできた軍配には「知進知退」の語句が書かれているそう。進むを知り退くを知る。やはり勝負の世界で重要なことらしい。まだ大一番は続く。反省を生かさなければならぬだろう。」 14日夜に8人で会食して非難を浴びた菅首相は、16日、記者団に「国民の誤解を招くという意味で、真摯に反省している」と語った。その後ネットなどで「誤解をした国民が悪いという言い方だ」と反発が拡大したそうであるが、当然であろう。国民は誤解などしておらず、菅首相の言動がちぐはぐだと思っているだけである。

[2020年12月19日(土)]

○今朝の東京新聞1面トップは『調布陥没「トンネル工事が原因」 NEXCO東日本が住宅損傷補償へ』と題する以下の記事であった。「東京外かく環状道路(外環道)の地下トンネルルート上にある、東京都調布市の市道が陥没し、地下に空洞が見つかった問題で、東日本高速道路(NEXCO東日本)の有識者委員会は18日、「トンネルを掘るシールド工事が要因の1つ」とする中間報告をまとめた。同社は、住宅に発生したひび割れなどの因果関係も認めて陳謝し、個別に補償する方針を表明した。(署名記事) ◆掘削断面が緩んで土砂が落ち込む中間報告では、トンネルを掘っている地下約47mの深さに、小さな石の割合が高くシールドマシン(大型掘削

機)で取り込みにくい地盤があると確認。夜間の工事休止後にマシンのカッターが回転しなくなり、動きやすいよう地中に気泡を注入したところ掘削断面が緩み、トンネル上の土砂が落ちこんだと推定した。トンネルの上を覆う地盤には緩衝材の役目を果たす粘土分が少なく、工事の振動が地上に伝わりやすいと分析。トンネルの真上を中心に、最大で1.9cmの地盤沈下が起きていた。有識者委員会の小泉淳委員長は会見で「特殊な地盤でシールド工事を行うという複合的な要因が重なったと推定している」と説明。未着工の外環道ルート上にも同様の地盤が複数あるとみられ「(地盤改良など)掘削前に対策が必要だ」と指摘した。また、シールドマシンが想定より多く土砂を取り込んだ可能性も言及。マシンが直径16mと大きく、少しの誤差でも陥没などにつながる危険性があるため、検証を続けるとした。◆「メカニズム判明までシールド停止」



会見に同席したNEXCO東日本関東支社の加藤健治・建設事業部長は、「工事が要因の1つと分かった。誠に申し訳ない」と陳謝。「家屋損傷があれば誠意を持って対応する。陥没などのメカニズムが判明するまで、外環道のシールド工事は止める」と述べた。NEXCO東日本は、有識者委員会による調査を年度内に終え、因果関係の詳細を公表する方針。工期への影響は不明という。市道陥没は10月18日に発生。その後、周辺2カ所の地中で長さ約30mの空洞が見つかった。◆リニアの大深度工事へ影響必至 地表から40m以上深い地下空間は2001年施行の大深度地下使用法により、首都圏、中部圏、近畿圏の一部区域を対象に、公共目的の事業に使用が認められている。用地買収は不要。東京外かく環状道路(外環道)やJR東海が進めるリニア中央新幹線など4件が認可されている。リニア工事では2021年度初めに北品川非常口(東京都品川区)からシールドマシンが発進し、都内の大深度工事が始まる予定。芝浦工業大の稲積真哉教授(地盤工学)によると、河川に近い地盤の砂などに含まれる地下水がシールドマシンの振動で分離して流れ出し、陥没や空洞ができる現象は珍しくないという。「こうした現象は大深度でも起きる。リニアのトンネルも、多摩川や中小河川の流れる地域を掘る。ボーリング調査の数を増やし、地中をレーダー探査するなど、事前に対策を考える必要がある」と話している。」

☑️ そもそも2001年施行の『大深度地下使用法』に問題があったと思われる。“大深度”を“地表から40m以上”と定義した理由は何なのか、理解に苦しむ。地盤の強度が深さのみで決まるはずがないではないか。特に東京首都圏は関東平野の中にあつて、軟らかい地盤が厚く堆積しており、その厚さ分布は地域によってまちまちである。もし“大深度”をきちんと定義するのであれば、それは深さではなく、地盤の十分な強度を目安にしなければならない。1995年兵庫県南部地震の後に、地下深部の地盤探査は国や地方自治体の補助によって飛躍的に進歩していたので、情報不足ということはないはずである。

- 今日の毎日新聞“余録”からも転載させて頂く。「名匠、左甚五郎が作った木彫りのネズミが動くとの評判で繁盛する宿屋。ねたんだ向かいの宿が地元職人にトラを彫らせる。トラににらまれたネズミはおびえたように動かなくなった。落語「ねずみ」である。▲話を聞いて甚五郎が来て見ると、何とも不出来なトラである。甚五郎に「なんであんな出来損ないにおびえるのか」と聞かれたネズミ「あれトラなの？ネコかと思った」…… 落語、講談、浪曲で庶民の人気を集めた甚五郎だった。▲日光東照宮の眠り猫など甚五郎作と伝えられる建築装飾は全国100カ所近い建物にある。だがその年代は室町時代末から江戸後期まで300年間近くに及ぶ。この伝説的な名前は何人もの達人たちの仕事に支えられていたのである。▲この列島の歴史の始まりから無名の職人や地域の共同作業によって受け継がれてきた日本の木造建築の技術である。その「伝統建築工匠の技」がユネスコの無形文化遺産に登録される。能楽や和食などに続く国内22件目の登録という。▲対象の17分野は木工や左官、屋根の瓦ぶきやかやぶき、建具や畳作り、外観や内装の装飾、漆塗りなどなど。なかには職人の高齢化や後継者不足が技術の継承を脅かしている分野もあり、すべてが国の「選定保存技術」となっている。▲ユニークな伝統技術こそが文化の垣根を越えて「クール」と映る今日である。どうか文化遺産登録が若い世代の関心を引きつけてほしい。むろん海を越えて来て技を極める「甚五郎」が現れるのも歓迎だ。」

[2020年12月20日(日)]

- 今朝の東京新聞にも『特殊地盤 軽視に怒り「健康被害を含めて補償して」』と題する記事があったので、以

下に転載させて頂く。「東京外かく環状道路(東京外環道)のトンネル工事のルート上にある、東京都調布市の住宅街で市道の陥没や空洞が生じた問題で、東日本高速道路(NEXCO東日本)が工事との因果関係を認め、家屋損傷への個別補償の方針を表明したのを受け、地元住民らでつくる「外環被害住民連絡会・調布」が19日、調布市内で記者会見を開いた。住民らはNEXCO東日本の事前調査や安全意識の不足を批判。「健康被害や資産価格の下落も補償を」と訴えた。(署名記事) ◆「悪い地盤予測されるも対策せず工事強行」会見には滝上広水代表ら住民約10人が出席した。NEXCO東日本の有識者委員会は18日にまとめた中間報告で、陥没やその近くで発見された空洞の原因の一つとして「特殊な地盤」を挙げた。小泉淳委員長は、工事前のボーリング調査地点が通常より少なかったと指摘している。会見ではこれらの点について、住民から「悪い地盤が予測されていたにもかかわらず、対策を講じず安易に工事を強行した」「安全管理の意識が欠如している」などと非難の声が上がった。 ◆「売ろうにも売れなくなって困っている」

陥没現場の東側の住宅街に住む女性は、大型の掘削機「シールドマシン」による地下の工事後、自宅周辺の住宅街で地盤の沈下現象が続いていると主張した。自宅を含め資産価格の下落に気をもみ「売ろうにも売れなくて皆さん困っている。ご主人に先立たれて自宅を売って老人ホームに入ろうと考えていた方が途方に暮れている」と話した。NEXCO東日本が表明した被害補償について、「家屋の損傷だけでなく資産価格の下落についても適正に償うべきだ」と求めた。

別の女性は、シールドマシンが自宅近くを通過したときの振動や騒音に悩まされた経験を話し、「NEXCOが考えているよりずっと広範囲に被害は広がっている」と語り「体の不調を訴えている人も多い。健康被害を含めて補償を求めていく必要がある」と述べた。

#### ◆調布市の市道陥没問題をめぐる経過

10月18日 調布市つつじヶ丘2の住宅街で市道が幅5m、長さ3m、深さ5mにわたって陥没。現場地下では9月中旬シールドマシンが通過。

19日 NEXCO東日本が専門家らを集め有識者委員会を開催。

27日 NEXCO東日本が原因を探るボーリング調査を開始。

11月 4日 ボーリング調査で陥没現場近くの地中に長さ30m、幅4m、高さ3mの空洞が見つかったと発表。

21日 新たに長さ27m、幅3m、高さ4mの空洞が見つかる。「外環被害住民連絡会・調布」結成。

12月18日 有識者委が「陥没はトンネル工事が要因の一つ」との中間報告をまとめる。

NEXCO東日本が記者会見で住民らに陳謝し、個別に補償する方針を表明。

19日 外環被害住民連絡会・調布が記者会見

☒ 地盤が軟らかいことは確かであろうが、決して“特殊地盤”ではない。NEXCO東日本はあたかも居住者側にも問題があったように説明するが、それは詭弁であろう。あくまでも地盤条件に関係なく『大深度地下使用法』を定めた国交省と、それを鵜呑みにしたNEXCO東日本に責任があると考えるべきであろう。



NEXCO東日本の中間報告を受け、会見する「外環被害住民連絡会・調布」のメンバーら=東京都調布市で

[2020年12月21日(月)]

○今朝の毎日新聞“余録”を以下に転載させて頂く。「11月のある日、丸善出版の飯岡千恵子さんは電車で神奈川県横須賀市に向かっていた。かばんには刷り上がったばかりの「理科年表」が入っている。確実に依頼主に届けなければ、何しろ帯には「南極観測隊も必携！」と印刷しているのだ。▲依頼したのは、その観測隊員の一人。今年は派遣計画がコロナ禍で大幅変更となり、隊員44人は横須賀で検疫のための隔離に入っていた。飯岡さんが理科年表を届けた翌朝、隊員は例年より1週間早く南極・昭和基地へと出発した。▲理科年表は自然科学を網羅する、世界的にも珍しいデータブックだ。創刊は1925年。紙不足だった終戦前後を除き、毎年発行されてきた。最新の2021年版は94冊目となる。▲南極観測隊の出発に合わせて出版時期を毎年11月にしたとも言われる。現地で活用されるだけではない。気温や降水量といった気象の章には、日本各地の都市名と並んで「昭和(南極)」の欄もある。▲データの時代、理科年表のページ数は増える一方だ。2005年には温室効果ガス濃度や大気汚染物質、外来生物を扱う「環境」の章が新設された。そこにも南極観測が貢献している。氷床には気候変動の歴史が刻まれ、上空のオゾン量は人類の安全にかかわる。南極は「地球環境の窓」なのだ。▲手元の理科年表のページを繰ってみる。来年の月食、空気の屈折率、世界の主なくぼ地、首都間の距離、過去の大地震、モグラの寿命。うそも誇張もないデータの海を漂いつつ、自然の奥深さに思いをはせる。」

[2020年12月22日(火)]

○読売新聞オンラインが本日13:33に配信した、『安倍前首相「不正には関わっていない」…東京地検の任意聴取で説明』と題する記事を以下に転載させて頂く。「安倍晋三前首相(66)側が主催した「桜を見る会」の前夜祭を巡り、東京地検特捜部が安倍氏から任意で事情を聞き、安倍氏が「不正には関わっていない」などと説明したことが関係者の話でわかった。特捜部は週内にも、政治団体「安倍晋三後援会」の代表を務める安倍氏の公設第1秘書を政治資金規正法違反(不記載)で略式起訴する方針で、安倍氏については不起訴とする見通し。前夜祭は2013年から昨年まで、後援会が「桜を見る会」の前日に東京都内のホテルで開催。安倍氏の地元支援者らが1人5000円の会費を支払い飲食が提供されるなどした。関係者によると、公設第1秘書は後援会の会計処理を実質的に担当し、会費徴収分のほか開催費の不足分を補填してホテル側に支払ったにもかかわらず、収支を後援会の政治資金収支報告書に記載しなかった疑いが持たれている。公設第1秘書は特捜部の聴取に対し「前夜祭の収入と支出は後援会の収支報告書に記載すべきだった」などと供述しているという。安倍氏は首相当時、国会で「後援会としての収入、支出は一切なく、収支報告書への記載は必要ない。補填したという事実は全くない」と答弁していた。ただ、安倍氏周辺によると、安倍氏が事務所の担当者に、差額を補填していないかどうかを確認した際、担当者から「支出していない」と虚偽の説明を受けていたといい、特捜部の事情聴取に対しても、不記載などへの関与を否定したという。市民団体などが同法違反容疑などで提出した告発状の対象者には、公設第1秘書のほか安倍氏らも含まれている。特捜部は、安倍氏が後援会の役職に就いていないことや聴取結果などから、安倍氏は前夜祭費用の補填や収支の実態を知らなかった可能性が高いと判断しているとみられる。」  
☒ 安倍晋三氏の厚顔無恥ぶりには今さら驚かないが、上記のようにこの問題を早期に收拾しようとの特捜部や読売新聞の態度は、国民に対して恥ずかしくないのだろうか。



衆院予算委員会で「桜を見る会」前夜祭に関するホテル側の回答を手に答弁する安倍前首相。(2020年2月17日、国会で)

[2020年12月23日(水)]

○今朝の東京新聞社説『安倍前首相聴取 議員辞職にも値する』を以下に転載させて頂く。「「桜を見る会」をめぐる疑惑で安倍晋三前首相が検察の事情聴取を受けた。国会で否定したが、証拠が出た以上、言い逃れはできない。国民に丁寧な説明が要るし、もはや議員辞職にも値しよう。今年2月の国会でのやりとりを思い出してほしい。野党議員が「桜を見る会」前日に東京都内のホテルで開かれた夕食会の疑惑を追及していた。会費は一人5000円とされていたが、その金額でまかなえるはずがない、安倍氏側が補填していたのではないかと、そう野党議員は質問した。「補填はしていない」「明細書もない」と安倍氏は繰り返した。さらに、その議員に向かって言い放ったのは「証拠を挙げていただきたい。ありえない」との言葉だ。告発を受けた東京地検が安倍氏の秘書らから事情聴取をし、約900万円にもものぼる補填の疑いが高まった。「ない」と言い張ってきた明細書も東京地検は入手している。これは動かぬ証拠である。もっとも秘書らは補填について「安倍氏には伝えていなかった」と述べているようだ。知らないなら共謀関係には問えない—つまり安倍氏自身は不起訴の公算が大きい。だが仮にそうだとすると、これだけ世間を怒らせ、国会を紛糾させた大問題である。安倍氏自身が真実を知る方法はいくらでもあったろう。そもそも真実を知る努力はしたのか。それを怠り、事実と異なる答弁を国会で繰り返したなら、その罪は重いと云わざるを得ない。これだけでも議員辞職に値しよう。秘書らが夕食会の収支を政治資金収支報告書に記載しなかったとして、政治資金規正法違反に問われれば、なおさら議員辞職は当然のことと考える。不記載は重い罪であるうえ、秘書らは事情聴取に「報告書に記載すべきだと分かっていた」と説明しているようである。より悪質である。夕食会の問題だけに矮小化してもいけない。「桜を見る会」には安倍氏の地元支援者らを数多く招き、「権力の私物化だ」と国民から厳しく批判された問題である。むろん公職選挙法にも触れかねない。その責任も極めて重いはずだ。安倍氏には開かれた国会の場で国民への真摯な説明が必要である。かつ、それは偽証罪に問われうる証人喚問の形でなければ、誰が単なる弁明を信ずるであろうか。あくまで「秘書のせい」などと答えるならば、この問題を到底、終わらせるわけにはいかない。」

○今朝の朝日新聞社説『前首相聴取 安倍氏は喚問に応じよ』も以下に転載させて頂く。「3ヵ月前まで首相の任にあった者が、在職中の政治資金の疑惑に絡んで検察の事情聴取を受ける——。この重い事実に向き合い、政治責任を果たすのか。まずは国会の公開の場で説明を尽くすことが不可欠である。「桜を見る会」の前夜祭の費用を安倍前首相側が補填していた問題で、東京地検特捜部が安倍氏本人から任意で事情を聞いた。安倍氏は関与を否定したとみられる。特捜部は会計処理の中心を担った公設第1秘書を政治資金規正法

違反(不記載)罪で略式起訴し、安倍氏は不起訴処分とする方針だという。この前夜祭をめぐっては1人5000円という会費が安すぎる、政治資金収支報告書に記載がないのはおかしいと厳しく追及されてきた。しかし安倍氏は、費用の負担は一切していない、参加者がホテルに直接会費を支払ったので、報告書に記載する必要はないと、およそ説得力のない説明に終始してきた。ところが、特捜部の調べで実際は直近の5年間で900万円超を補填していたことがわかった。安倍氏が1年近く国会や記者会見で繰り返してきた説明は虚偽だったことになる。衆院調査局の調べでは、「事務所は関与していない」「明細書はない」「差額は補填していない」という事実と異なる答弁は少なくとも118回にのぼるといふ。これほど虚偽がまかり通っては、まともな議論は成り立たない。首相自ら国会の行政監視機能を掘り崩す由々しき事態である。第1秘書らは補填の事実を安倍氏には伝えず、不記載も自分たちの判断だったと話しているという。しかし、そもそも無理のある説明を、安倍氏は何の疑問も抱かずに了解したのか。国会でホテル側への確認を再三求められた経緯に照らしても、にわかには信じがたい。補填が明るみにでて1ヵ月近くたつが、安倍氏はこの間、具体的な説明に応じていない。自民党は捜査に区切りがつけば、安倍氏が国会で説明する機会を設けるようだが、非公開で議事録にも残らない議院運営委員会の理事会を軸に検討しているというのだから、あきれるほかない。これでは政治への信頼回復などおぼつかない。公開の場でなされた虚偽答弁をただすのは、やはり公開の場でなければならない。中曽根康弘、竹下登、細川護熙各氏ら、首相経験者が予算委員会の証人喚問で疑惑を弁明した先例もある。安倍氏は国会での説明に「誠実に対応したい」と語った。ならば、ウソをつけば偽証罪に問われる証人喚問に堂々と応じるべきだ。」  
☞ 全国紙のうち、この問題を今朝の社説に掲げていたのは朝日新聞だけであり、東京新聞の奮闘も大いに評価したい。前日の読売新聞の記事と比較してみれば、各紙の立ち位置の違いは明らかであろう。

[2020年12月24日(木)]

○河北新報に『河北新報 震災アーカイブ』の欄があることに、遅まきながら気が付いた。冒頭の挨拶文のみを以下に転載させて頂く。「2011年3月11日に発生した東日本大震災は、わたしたちのふるさと東北に、甚大な被害を与えました。河北新報社は、被災地にある新聞社として「100年に一度」とも言われる大震災を後世に伝える国の「東日本大震災アーカイブ」プロジェクトに参加し、東北大学災害科学国際研究所の支援協力のもと、このアーカイブサイトを立ち上げました。新聞記事や報道写真のほか、市民の皆様が撮影した貴重な写真や動画なども収集・保存・整理し、可能な限り順次公開していきます。震災の教訓が語り継がれ、今後の防災・減災に少しでも役立つように、多くの皆様が利用しやすいサイトづくりを目指してまいります。どうぞ、よろしくお願いたします。2013年1月17日 河北新報社」また、2020年3月11日付で「月命日以外でも震災関連記事をご覧いただけます。2021年春までの期間限定で「河北新報データベース」の契約は不要です。」とのありがたい記述も付記されていた。

新聞記事・写真を3D地球儀で見る  
> このページへ移動

新聞記事・写真をGoogle Mapで見る  
> このページへ移動

写真・関連記事を検索する  
> このページへ移動

写真・動画を提供する  
> このページへ移動

河北新報紙面で振り返る大災害  
> このページへ移動



○今朝の東京新聞“筆洗”を以下に転載させて頂く。「白いひげの男は毎年、この日の夜、決まってこの店にやってくる。ただし今年はいくらも早い。いつもの年なら明け方近いのにまだ十時だ。▼「仕事はもう終わったのかい」。白いひげの男はミルクを注文する。「ああ、今年はちょっと事情があるんじゃない」。▼主人はおもしろくなかった。この男の仕事はこの夜でなければ意味がないはずだ。男の仕事を待っている人がいる。とりわけいやなことが多かった今年である。なのに、この男ときたら。主人はミルクのカップを乱暴に置いた。▼「仕事ならちゃんと済ませているさ」。白いひげの男は弁解した。「ああ、そうだろうとも」。主人は納得しなかった。ひげの男はため息をつくとき、上着の内ポケットから手帳を取り出し、ページをめくった。「ああこれだ、4月12日。マスクがなくなって困ってはいなかったかい」。▼主人はよく覚えていた。どうしても出掛けなければならなかったが、マスクが手に入らない。しかたなく地下鉄の中ではハンカチで口を覆っていたが、見知らぬ男に「非常識だ」と大声で言われた。車内の誰もが、自分を非難しているようだった。▼「あの時、マスクをくれた女の人がいたが、あれが」。▼「今年は一年中、忙しかったさ。こういう年だもの」。ひげの男は席を立った。店を出る時、こう言って笑った。「来年はきっと、いつも通りの時間に来るはずじゃない」

☞ 落語で云うなら“考え落ち”だろうか。

2020年12月24日 文責：瀬尾和大